

『ガリヴァ旅行記』と『セヴン』における
「怒り」の特質について

山内 暁彦

Anger in Gulliver's Travels and Seven

YAMAUCHI Akihiko

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 1340-5632

第24巻 別刷 2016年12月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*

The Faculty of Integrated Arts and Sciences

Tokushima University

Volume XXIV, December 2016

『ガリヴァ旅行記』と『セヴン』における
「怒り」の特質について

山内 暁彦

Anger in Gulliver's Travels and Seven

YAMAUCHI Akihiko

Abstract

This essay examines the deadly sin of anger (wrath) in Jonathan Swift's *Gulliver's Travels* (1726) and Andrew Kevin Walker's film *Seven* (1995). While anger in aphorisms written by Gustav Flaubert or Ambrose Bierce seems to be light and humorous, the anger expressed by Det. Mills and John Doe in the film *Seven* is intense and serious due to horrible homicides committed in a very extraordinary situation. In contrast to *Seven*, 'colère' in the French/Italian film of comedy *Les Sept Péchés Capitaux* (1952) appears light and vulgar because it is tied to a quarrel between husband and wife. Both Swift and John Doe display aggression as a means to force people to pay attention to them by kicking the stomach or hitting with a sledgehammer. Both of them share 'indignation' against the squalor in the corrupted world around them. Avoiding 'sæva Indignatio (fierce indignation)' requires us to be patient as Gulliver displayed at the court of Brodgingnag when the virtuous giant King treats him as a tiny insect.

序

本論では、ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) の『ガリヴァ旅行記』 *Gulliver's Travels* (1726) と、監督デヴィッド・フィンチャー (David Fincher)、脚本アンドリュー・ケヴィン・ウォーカー (Andrew Kevin Walker) によるアメリカ映画 *Seven* (1995) における「怒り」の特質について考察する。『ガリヴァ旅行記』の風刺対象は多種多様であり、当然のことながら「七つの大罪」に含まれる様々な悪徳も含まれている。その中でも、第4篇「フウイヌム国渡航記」‘A Voyage to the Country of the Houyhnhnms’ の最終章で言及されている「高慢」に対する風刺は、かなり分かりやすい形で提示されている。

... when I behold a Lump of Deformity, and Diseases both in Body and Mind, smitten with *Pride*, it immediately breaks all the Measures of my Patience; ... The wise and virtuous *Houyhnhnms*, who abound in all Excellencies that can adorn a rational Creature, have no Name for this Vice in their language, ...

心身ともに醜さと病気の塊のような輩が「高慢」にしているのを見ると、即座に私は堪忍袋の緒が切れてしまう。... 賢明で高潔なフウイヌムたちは、理性的な存在に相応しい多くの美点を持っているが、彼らの言語にはこの悪徳を言い表す名称がないのだ。¹

「高慢」は「七つの大罪」 (The Seven Deadly Sins) の筆頭である。² サタンの

¹ Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* (Cambridge: Cambridge UP, 2012) 443-44. 作品からの引用はこの版により、本文中の括弧内に、篇、章、頁数の順で示す。拙訳は、富山太佳夫 訳『ガリヴァ旅行記』(岩波書店〈ユートピア旅行記叢書6〉、2002年)、中野好夫 訳『ガリヴァ旅行記』(新潮社、1992年改版)、平井正徳 訳『ガリヴァ旅行記』(岩波書店、1980年)、山田 蘭 訳『ガリバー旅行記』(角川書店、2011年)を参考にした。

² 平川祐弘によると「七つの大罪は普通、傲慢、貪欲、邪淫、嫉妬、貪食、憤怒、怠惰の順で呼ばれることが多い」とのことである。但し、ダンテの『神曲』「煉獄篇」では、魂たちは以下の順で浄められる。平川が翻訳で使用した訳語を用いて記せば、「高慢、嫉妬、怒り、怠惰、貪欲、大食らい、色欲」の順である。高慢(傲慢)は筆頭で不動の位置を占めるが、他は順序を変更することが可能であり、訳語もいろいろな表記ができることが分かる。ダンテ、平川祐弘 訳『神曲 煉獄篇』(河出書房新社、2009年) 134頁を参照。本論では「高慢、嫉妬、怒り、怠惰、貪欲、大食、色欲」を主に用いる。

神に対する反逆もこの悪徳ゆえであった。レオ・ダムロッシュ (Leo Damrosch) は、次のように述べている。“A central tenet of Christian doctrine is that pride is the fundamental sin, the one that motivated Satan’s rebellion . . .”³ 『ガリヴァ旅行記』でスウィフトは、作品の締めくくりに際して、敢えて「高慢」に言及しているのだが、これに対し、他の六つの大罪に関しては、作品の各所において散見されるものの、「高慢」ほど目立った扱いはされていない。例外として挙げられるのは、第2篇「ブロブディングナグ航海記」‘A Voyage to Brobdingnag’での巨人たちの健啖さに表された「大食」であるが、巨人の食べる量が多いのはむしろ理の当然であって、縮尺が12倍（体積は1728倍）の世界のリアリティーを作者なりに追求した結果であると取るのが正しい。

一方の『セヴン』は、連続殺人事件を扱う2人の刑事が犯人を追いつめていく過程で、各殺人が「七つの大罪」の各項目に即している異常な事件であることを突き止めていき、最終的には、犯人に仕組まれた罠に主人公がはまってしまうことで、悲劇的な結末を迎えると共に、「七つの大罪」が万遍なく出そろって終わるという内容の、サイコ・スリラー・サスペンス・刑事ものの傑作である。とりわけ、ラストで登場する「怒り」に関わる描写が、観客の予想を覆す、凄まじいものとなっている。

本論では「七つの大罪」の中から「怒り」を中心に考察する。「怒りは、本当に、傲慢の実行者というものです」(“For ire is the executioner of pride.”)とも言われ、「怒り」こそ「高慢」に匹敵する大罪であるとされるからだ。⁴ その際、往年のオムニバス映画『七つの大罪』(Les Sept Péchés capitaux, 1952年)を参考にする。『ガリヴァ旅行記』と『セヴン』の両作品で、最も怒っているのは誰であるか考えていくとともに、そこにある激しい「怒り」とは「義憤」あるいは「公憤」に他ならないということを論じたい。最後に「怒り」全般に対して我々が取るべき対処法について、「ブロブディングナグ航海記」でのガリヴァ自身の態度を参考にしながら考察する。

³ Leo Damrosch, Introduction, *Gulliver’s Travels*, by Jonathan Swift (New York: Signet-Penguin, 2008) xi.

⁴ チョーサー作、榊井迪夫訳『完訳 カンタベリー物語(中)』岩波書店、1995年、93頁。Geoffrey Chaucer, *The Canterbury Tales* (London: Penguin Books, 1951) 330.

I

まずは、「怒り」とは何かについて、辞書的な意味を確認しておきたい。『広辞苑』によると、こうなっている。

いかり【怒り】

おこること。はらだち。立腹。「一を抑える」「一を買う」⁵

この上なく簡単な定義（というより単なる言い換え）は、この語が極めて一般的な、誰もが知悉している感情を表すものであることを端的に表している。また、手元の Apple 社製 Mac に内蔵されているアプリケーション「辞書」中の「国語辞典」では、「いかること。おこること。腹立ち。立腹。」とある。この定義の後には、慣用表現として「一に燃える」「相手の一をかう」「一をしずめる」という語句が見える。『広辞苑』の「一を抑える」「一を買う」ともども、これらはいずれも我々が日常的によく使う表現である。しかしながら、これではいささか簡単過ぎるので、同じ「辞書」の「英和/和英辞典」も試してみる。

いかり【怒り】 anger ((at, for) ; 【抑えられないほどの】 (a) rage ((at, against, over) ; 【気も狂わんばかりの】 (a) fury; 【不正卑劣な行為に対する】 indignation ((at) .

例文として、「彼は怒り狂って（かっとなって）花瓶を私に投げつけた He threw the vase at me in a fit of anger [rage].」が添えられている。この後には様々な語義や例文が挙げてある。また「憤慨」も見よ、との指示があるので見てみる。徐々に語彙が増していった具合が良いだけでなく、「憤慨」には簡単な解説も付されていて参考になる。

ふんがい【憤慨】 [名詞]

【不正などに対する】 indignation; resentment. (!不正を働いた者に対する恨みを暗示する)

憤慨する [動詞]

be [feel*] indignant; be [get*] very angry. (!前の方は不正卑劣行為など正当

⁵ 『広辞苑』第6版、2008年。

な理由で怒ること。後の方は主に個人的理由で怒ること)

ここで分かるのは、‘indignation’ ないし ‘resentment’ には、‘anger’ や ‘angry’ とはかなり異なる意味合いがあるということだ。スウィフトに関して言えば、彼の墓碑銘がまさにこの言葉 ‘indignation’ を含んでいることは、周知の事実であろう。以下に、墓碑銘のラテン語原文の一部とその英訳を記す。

Ubi sæva Indignatio
 Ulterius
 Cor lacerare nequit
 (where fierce Indignation
 can no longer
 injure the Heart) ⁶

つまり、風刺家として持った彼の「怒り」は、当然のことながら、個人的な怒りというよりはむしろ、世間一般に向けられた義憤、公憤であったということと、墓碑銘の文言 ‘sæva Indignatio’ とがまさに一致している訳である。

Mac の「辞書」に戻ると、さらに、「憤慨」の語義の後には「憤り」も見よ、との指示があるのでこれも見てみると、英訳は ‘indignation’ の 1 件のみである。

いきどおり【憤り】

indignation.

▶ その誘拐犯人に強い憤りを感じた

I felt strong *indignation* against the kidnapper.

社会的にも人間としても許されざる「誘拐犯人」に対する「怒り」を表すためには ‘indignation’ が相応しいということがここには端的に示されている。我々が本論で中心的に扱うことになる言葉がまさにこれである。

ここまでは、世間一般の辞書的な意味を見てきたが、少し変わった切り口で

⁶ これはスウィフトの自撰した墓碑銘の一部であり、全体はこの倍ほどになる。W.B.イエイツ (W.B. Yeats) は、このラテン語の墓碑銘を自由に英訳して詩作し、‘Swift’s Epitaph’ を書いた。その詩の中では、この部分の文言は ‘Savage indignation there / Cannot lacerate his Breast.’ となっている。
 <https://en.wikipedia.org/wiki/Swift%27s_Epitaph>

「怒り」の定義付けをしているものもある。例えば、フロベール (Gustav Flaubert, 1821-80) によれば「怒り」の定義は以下ようになる。

COLERE: Fouette le sang; hygiénique de s'y mettre de temps en temps. ⁷

怒り colère, exaspération 血を掻き立てる効があるから、ときどき怒りを発することは健康によい。つねに「心頭に発す」。⁸

フロベールの定義はこれだけであるが、辞書的な定義とは随分趣が違っている。訳文の後半では、紋切り型として、「怒り」といえば「心頭に発す」と付けておくにしかず、と読者に指示している。前半の「効がある」の件は、もちろん、冗談で書いていると思われる。だが、これは一面真理でもある。ポイントは「ときどき」にある。人間は始終怒ってはいけなからだ。ここでの「怒り」は大罪の対極ともいうべき軽いものとしてユーモラスに扱われている。あるいは、エスプリに満ちていると言うべきであろうか。注意すべき点は、「怒り」と一口に言っても、見方によって軽重の差が著しく変わってしまうことである。

ところで、フロベールは、「怒り」を一種の必要悪であるかのように述べていたが、芥川龍之介もまた、よく似た考え方を示している。『侏儒の言葉』で彼は次のように述べているのだ。「敵意は寒気と選ぶ所はない。適度に感ずる時は爽快であり、且又健康を保つ上には何びとにも絶対に必要である」と。⁹ これは「敵意」の項目の全体なのであるが、「敵意」を「怒り」に置き換えると、ほぼフロベールと同じ意見になるだろう。芥川自身は『侏儒の言葉』ではフランスの大小説家のことを高く評価してはいないようだが、両者相通ずるものがあることは興味深い。¹⁰

さらに我々の扱う「七つの大罪」での「怒り」は、英語では 'anger' や 'indignation'、'resentment' ではなく 'wrath' が用いられる。従って、同じ「怒

⁷ Gustave Flaubert, "Dictionnaire des idées reçues." iBooks.
<https://itun.es/jp/4tE_K.l>

⁸ G. フローベール、山田 壽 訳『紋切り型辞典』（東京：平凡社、1988年）13頁。なお、上の、iBooks からとったフランス語原文と内容が一致していない事情については、同書「訳者あとがき」に詳しい。

⁹ 芥川龍之介『侏儒の言葉・西方の人』（東京：新潮社、1995年）38頁。

¹⁰ 「フロオベルのわたしに教えたものは美しい退屈もあるということである。」『侏儒の言葉』55頁。

り」でも ‘anger’ などと ‘wrath’ とをよく区別すべきであるだろう。このことを確認しつつ、さらにユーモアあふれる定義付けを見ていこう。フロベールの次には、アンブローズ・ピアス (Ambrose Bierce, 1842-c.1914) の、これまた一風変わった辞書を見てみることにする。彼の『悪魔の辞典』 *Devil's Dictionary* には ‘anger’ の項目はなく、その代わりに ‘wrath’ の項目がある。そこでは ‘wrath’ の定義として以下のように書かれている。

WRATH, n. Anger of a superior quality and degree, appropriate to exalted characters and momentous occasions; as, “the wrath of God,” “the day of wrath,” etc. Amongst the ancients the wrath of kings was deemed sacred, for it could usually command the agency of some god for its fit manifestation, as could also that of a priest. . . .¹¹

WRATH【怒り・憤り】名 ただの怒り (anger) よりも、質量ともに優れた怒りであって、例えば「神の怒り」とか「天罰の日」とかのように、高い身分の人物や重要な出来事にふさわしい。古代人にとっては、王の怒りが神聖なものであった。というのも、王がその怒りを相応に発揮するため、神の力を駆使できたからだ。むろん聖職者の力も。¹²

こうした定義付けの後、ピアスは、ギリシャ人に対するアキレウスの怒りや、ダビデに対するエホバの怒りの故事を引いている。確かにこれらは、深刻で大仰な種類の「怒り」である。ここで注意すべき点は、ピアスは意図的に「七つの大罪」の一つとしての「怒り」に相応しい定義をしてはいないように見える点である。逆に、神自身が「怒り」を持つことを揶揄しているかのような書きぶりになっていて、この扱い自体に神学上の問題が含まれることとなる。また、筒井康隆による訳文では、‘wrath’ と ‘anger’ は別物のごとくになっているが、原文では ‘wrath’ は ‘anger’ に含まれるような書き方になっている点にも注意を要する。我々の観点では、日本語では同じ「怒り」であっても、英語では、‘anger’ が広い意味の「怒り」であり、最も一般的な語と捉えておくこととする。一方 ‘wrath’ は ‘anger’ より深刻で格調高い「怒り」であるだろう。従って、‘anger’

¹¹ Ambrose Bierce, “The Devil’s Dictionary.” iBooks. <<https://itun.es/jp/AW8vD.l>>

¹² アンブローズ・ピアス、筒井康隆訳『筒井版 悪魔の辞典 (完全補注) 下』(東京：講談社、2009年) 261-62頁。訳文中の「天罰の日」は「怒りの日」でもよかっただろう。‘Dies Iræ’の英訳が ‘the day of wrath’ であるので。

は格調の点で ‘wrath’ に劣るが、場合によっては ‘wrath’ や ‘indignation’ に相当する「激しい怒り」も表し得る訳であるから、これらは同等に扱うこともできると考えることとしよう。

II

では、辞書的な簡略すぎる定義と、アフォリズム的で多少ふざけた定義から離れ、「怒り」‘wrath’ の中でも真に深甚なものとしては何を例として挙げるべきであろうか。本論では、よく知られた映像作品である『セヴン』を取り上げることにする。¹³ 作品のラストで、ブラッド・ピット (Brad Pitt) 演じる刑事ミルズ (Det. Mills) が、ケヴィン・スペースイ (Kevin Spacey) 演ずる容疑者 (犯人) ジョン・ドウ (John Doe) に銃を向ける。¹⁴ さんざん逡巡したあげく、遂には射殺してしまう。この場面のミルズの止むに止まれぬ心の苦しみ。単に「怒り」と称するには複雑すぎる心情。刑事という、法と正義を重んじねばならぬ職務に課せられた義務と、愛する妻ばかりか胎内の赤子までも惨殺された、夫としての、そして父親としての怒りとに板挟みになり、犯人に向けて構えた銃を何度となく下ろしながら、最後には引き金を引く。それも拳銃の全弾を撃ち込むという決定的な怒りの発露が大変印象的である。観客は主人公とともに葛藤に苛まれつつも、ある種の爽快感やカタルシスさえ感じるであろうこのシーンは、映画史上に残る名場面であると個人的には感じている。ヘリコプターからの空撮と、モーガン・フリーマン (Morgan Freeman) 演ずる同僚 (先輩) 刑事サマセット (Det. Somerset) の視点からのクローズ・アップを巧みに組み合わせ、音声的には無音の瞬間を時おり挟み込む手法により、緊張感を保持しながらも、原野というべき荒蕪地に、現代文明の象徴というべき高圧送電線の鉄塔が延々と続く、異様な風景の中での非現実的な出来事であるかのように映し出しているのだ。田中紀子は、この風景について以下のように述べている。

ミルズがドウに引き金を引くのは都市の外に広がる砂漠地帯においてで

¹³ 『セヴン』の原タイトル *Seven* の表記法は、「v」を「7」に置き換え *Se7en* と表記される場合もある。「v」を左回りに 120 度ほど回転させると「7」になるというわけだが、視覚的には少し無理があるようだ。

¹⁴ ジョン・ドウ (John Doe) は、姓名が不詳の人物に付ける仮の名である。女性であれば、ジェイン・ドウ (Jane Doe) となる。本作では犯人の本名がジョン・ドウであるかのようになっている。但し、「ジョン」または「ドウ」とだけ記すのは違和感があるので、彼だけはフルネームで「ジョン・ドウ」と記す。

ある。目を射るようなオレンジ色の夕日が照りつける乾ききった土地は、この事件の不毛性をさらに強烈に印象づける。

「砂漠地帯」というのは言い過ぎの感があるが、荒涼とした場所であることは間違いない。¹⁵ 筆者は、かつてこの映画の公開時に劇場で鑑賞したことがあるが、最近再度オンラインで視聴し、新たな発見があった。現場が高圧電線がないただの原野であつたら、異変を察知したヘリの警官が急遽着陸し、刑事ミルズによる殺人を未然に防いだ可能性が出てきてしまうのだ。この舞台装置は、単に異様な風景であるというだけでなく、ミルズの犯人射殺を確実なものにするという役割もあつたのである。『セヴン』のラストは、犯人の「嫉妬」‘Envy’ とミルズ刑事の「怒り」‘Wrath’ が同時に提示されることにより、それまでの殺人事件（一部殺人未遂）で「大食」‘Gluttony’、 「貪欲」‘Avarice’、 「怠惰」‘Sloth’、 「色欲」‘Lust’、 「高慢」‘Pride’ の順で、五つ揃えられた大罪が、最後に二つまとめて提示されることで、七つすべて一挙に出そうという見事な趣向である。こうしてミルズは法の裁きを受けるべく連行され、犯人は（恐らくは）地獄へ送られることになるのだろう。この作品に描かれたミルズの「怒り」こそ「怒り」の最たるものの一つとして捉えることができるものだ。

ところが、同じ「七つの大罪」をテーマに作られた映画でも、往年のフランス＝イタリア合作のオムニバス映画『七つの大罪』 *Les Sept Péchés Capitaux* は、ずっとユーモラスだ。快活で軽妙な雰囲気ジェラルール・フィリップ (Gerard Philipe) 演じる、遊園地のアトラクションの係員による案内で、玉投げの的にされた人形によって寓意的に表された「大罪」が順に紹介されて行く。それぞれ異なる監督や脚本家によって作られた、独立した短篇映画からなる連作である。本論で扱っている「怒り」は、第1話「貪欲と憤怒」‘L’avarice et la colère’ で、夫婦者の妻の方の「怒り」として描かれる。「貪欲」を体現する夫は、収益物件からの利益を夫人に還元しようとし、金の亡者のような人物である。一方、妻は美容院に予約を入れているのに、夫からお金をもらえず、盗みの疑いまでかけられて、立腹のあまり自分で髪の毛を切ったりする。簡単にいえば、

¹⁵ 田中紀子「「戦う価値がある」のか？—『セヴン』に見る現代都市—」（『大手前大学人文科学部論集』4、2003年）90頁参照。なお、ウォーカーの脚本ではこの場面を‘marsh’（湿地帯）と称しているが、映像を見る限り、湿地でもないようである。筆者の手元の公刊された脚本は、Andrew Kevin Walker, *Seven* (London: Faber and Faber, 1999) であるが、映画とは各所がかなり異なっている。

夫の「食欲」に対する妻の「怒り」である。この第1話では「怒り」と「食欲」が組になっていて、世間にありがちな亭主と夫人の諍いという、軽妙かつ軽薄な扱いをされていると言える。計七つあるエピソードの最初で、映画全体での「七つの大罪」自体の扱い方が、いずれも深刻なものでないことを予感させるという意味で、この第1話は重要なエピソードになっている。また、『セヴン』と比較すると、同じ「怒り」を扱っても、その手法の違いによって、作品自体がいかにか大きく変わり得るかがよく分かる例となっているだけでなく、「怒り」を含む「七つの大罪」というテーマで作品を作る際には、可能性の幅は相当広いものであることも如実に感じられることだろう。

ユーモアとウィットを前面に押し出した作品としてこの映画全体を評価するとすれば、一夜の宿を借りた医師が、宿の奥さんとの行為よりも、美味いチーズに引かれていたという落ちのついた第5話「美食」‘La Gourmandise’が最も優れ、次いで、天国の様子をあたかも役所か会社であるかのように描き、ロケット発射や、過労死といった、現代文明のもたらす弊害を「怠惰」の影響力で上手く押さえ込んでしまおうという目論見を描いた第2話「怠惰」‘La Paresse’が、「怠惰」にも効用があるという、意表をついたエスプリが感じられ、風刺として見た場合にはかなりの傑作である。

逆に、あまり良くないものとしては、第7話「第八の大罪」‘Le Huitième Pêché’が挙げられる。この最終エピソードは、遊園地のアトラクションを店じまいにしたジェラルド・フィリップ自身が語る構成になっていて、映画全体を締めくくる役割を担っている。ここでは「第八の大罪」としてこの映画のオリジナルの「大罪」である「想像の罪」が追加的に提示される。枢機卿と一見して分かる人物や、裸体の女性、黒人、中国人、矮人など、怪しげな人物像を揃えて、いったい何が起ころのだろうと思わせ、実は彼らは皆、絵のモデルだった、ということが明かされる。「観客の皆さん、変な想像をしませんでしたか」という心である。映画が想像力をかき立てるメディアである以上、この発想自体は悪くはないだろう。だが、このエピソードは蛇足の感は否めないというのが筆者の率直な意見である。

ともかく、映画全体としてみた場合、「七つ」ならぬ「八つの大罪」の全体が、軽妙洒脱に扱われていて、深刻さは微塵もない作りになっている。こうした点で、この映画は、陰惨で衝撃的な殺人を描いた暗い『セヴン』とは対照的に明るい作品になっていることは確かである。1952年と古い時代の制作であることと、カトリック教国であるフランス、イタリアの作品として見た場合、恐らく『セヴン』のように正面から凄惨な殺人事件を扱ったストーリー仕立てに

することには憚りがあるという理由で、世俗的かつ滑稽なエピソードを揃えたと言うこともできるだろう。

ところで、『セヴン』の制作者たちは、一体どの程度このオムニバス映画に影響されているかも興味のあるところだ。「七つの大罪」は、「貪欲」と「大食」には、欲望という点で共通する面があるように感じられる。¹⁶ この二つを除けば、「七つの大罪」は、それぞれが別個のものであるはずなので、物語にする際も別個に扱うのが正しいだろうと通常は考えられるだろう。映画であれば、計7篇のオムニバス映画が制作されることになるろう。『七つの大罪』と同様のオムニバス映画である1910年のサイレント映画『七つの大罪』(*Les Sept Péchés capitaux*)でも、ジャン=リュック・ゴダール(Jean-Luc Godard)らの1962年の『新・七つの大罪』(*Les Sept Péchés capitaux*)でも、七つは別個に扱われている。¹⁷ ところが『七つの大罪』の第1話では「貪欲」と「怒り」がセットになっていて「七つの大罪」のうちの二つをまとめるという手法を取っていた。『セヴン』でも「怒り」と「嫉妬」をセットにしていた訳であるから、『セヴン』は『七つの大罪』の手法を先例としているとみなすこともできる。

III

では、一方の『ガリヴァ旅行記』においては「怒り」どのように表現されているであろうか。先に述べたように「七つの大罪」の一つとしての「高慢」が『ガリヴァ旅行記』の第4篇「フウイヌム国渡航記」の末尾で明示されているのであるが、他の6件に関しては、個別具体的に言及されていないようであ

¹⁶ 「貪欲」と「大食」は、それぞれ金銭と食物に対する欲望であるので、対象は異なっているのだが、日本語で「貪欲」というと、比喩的にであれ、「食欲」を想起させる事情があることが、混同の理由の一つであると考えられる。また「貪欲」と「食欲」は字面も似ている。仮に「貪欲」を「強欲」と言い換えれば、こうした問題は避けられる。日本語以外の言語では、両者は全く異なるので、混同の余地はないから、これはむしろ日本語の問題である。

¹⁷ 『七つの大罪』*Les Sept Péchés capitaux* というタイトルを持つ映画はかなりの数に上っている。古くは1900年のジョルジュ・メリエス(Georges Méliès)のサイレント映画、1910年のサイレント映画がある。続いて、ジェラルド・フィリップの1952年のもの。ちょうど10年後にゴダールらによる1962年のものがある。これは、邦題では「新」が付けられている。さらに最近では1992年のものがある。(以上、フランス語版 Wikipedia, 'Les Sept Péchés capitaux' の項による。)メリエスといい、ゴダールといい、著名な映画人がこのテーマに引きつけられてきたことは、このテーマの持つ可能性の大きさを示している。

る。その理由として考えられるのは、それぞれの悪徳がいろいろな手法で列挙されていく中に包括されてしまっているということだ。例えば、第2篇、第6章の国王の言葉の中には様々な悪徳が目白押しになっている。

He was perfectly astonished . . . protesting it was only an Heap of Conspiracies, Rebellions, Murders, Massacres, Revolutions, Banishments; the very worst Effects that Avarice, Faction, Hypocrisy, Perfidiousness, Cruelty, Rage, Madness, Hatred, Envy, Lust, Malice, and Ambition could produce. (II, vi, 188)

国王はこう言ってひどく驚かれた . . . お前の話したことは要するに、陰謀、叛逆、殺人、虐殺、革命、追放の連続ではないか。まさにこういったものこそ、貪欲、党派心、偽善、背信、残酷、憤怒、狂気、憎悪、嫉妬、情欲、悪意、野心が生んだ最悪の事態ではないか。

このように「七つの大罪」は他のいろいろな悪徳に混じって、風刺のリストの中に適当に分散して配されているため、個別具体的には大して目立たなくなっている嫌いがあるのである。『ガリヴァ旅行記』で「怒り」がどのように表現されているかをさらに検討していこう。まずはガリヴァ本人はどうだろうか。終始温厚な振る舞いをするガリヴァ自身は、「怒り」の感情からはかなり遠いところにいるように見える。ただし、彼が全く立腹しない訳ではない。第2篇「ブロボディングナグ渡航記」の中で、宮廷の小人に苦しめられる箇所においては、さすがのガリヴァも相当困ったと言う。

Nothing angered and mortified me so much as the Queen's Dwarf; who being of the lowest Stature that was ever in that Country, (for I verily think he was not full Thirty Foot high) became so insolent at seeing a Creature so much beneath him, that he would always affect to swagger and look big as he passed by me in the Queen's Antechamber, while I was standing on some Table talking with the Lords or Ladies of the Court; and he seldom failed of a smart Word or two upon my Littleness; against which I could only revenge myself by calling him *Brother*, challenging him to wrestle; and such Repartees as are usually in the Mouths of *Court Pages*. (II, iii, 151)

王妃の侏儒ほど私を怒らせイライラさせたものはなかった。この男はこの

国始まって以来の小男で（確かに身長は 30 フィートもなかった）、自分でも遥か下に見下ろせる小さな人間を見て、急に生意気になってしまったのだ。王妃の居間に通じる控えの間で、私がテーブルの上に立って宮廷の貴族や淑女たちと話をしていると、彼は通り過ぎながら威張り散らして大きな顔をしたものだ。そして、決まって彼は私の小ささに毒づいてきたものだった。それに対して私は、おい兄弟と尝试してみたり、相撲を取ろうと尝试してみたり、宮廷の小姓たちが口にするような当意即妙の言葉を口にしてやり返すばかりだった。

ガリヴァ自身の身長は、6 フィート内外であるから、侏儒であるとはいえ、身長が 30 フィート（約 9 メートル）もある人物と比べれば、わずかにその 5 分の 1 であるに過ぎない。つまり、ガリヴァは自分の 5 倍の背丈の人間と対峙していることになるのだ。¹⁸ 従って、どのような理不尽な仕打ちにあっても、ガリヴァは肉体的には到底太刀打ちできないから、言葉でやり返すほかなかったのである。この場面では、ガリヴァは侏儒に偉そうに振る舞われただけであるが、この後、彼が生命の危険を感じるエピソードが紹介される。侏儒はガリヴァをクリーム壺の中に突っ込んでしまい、危うくガリヴァは溺れかけてしまうのである。さすがのガリヴァも堪忍袋の緒が切れるのだが、自分で復讐するまでもなく、侏儒は鞭打たれ、クリームを全部飲まされた上、放逐されてしまう。この侏儒の悪戯のエピソード全体を通じて見られる風刺の意図としては、時には自分の卑小を顧みず、自分より更に小さいものに対しては、尊大に振る舞いがちな人間の弱点を突いたものが想定されると言うことができる。即ち、虚栄心に対する風刺であると捉えるのが相応しい。だが、巨人国でガリヴァが常に経験している様々なユーモラスな事件事故の一環としての要素の方が顕著であるため、風刺としてはいささか弱いと言わざるを得ないのも事実である。

そこで、我々が注目すべきなのは、ガリヴァが、いわゆる主人公として身をもって体験する各エピソードというよりはむしろ、『ガリヴァ旅行記』の語り手（ないし書き手）として読者に語りかける場面において、「怒り」等の大罪にどのように言及しているかである。あるいは、登場人物としてみた場合でも、プロブディンナグ国王やフイヌムの主人と対談をした際の、ガリヴァの発言の中にある個々の大罪についての言及に着目すべきであるということである。この場合は、ガリヴァばかりでなく、対談の相手の人物の意見も同様の重要性

¹⁸ 身長が 5 倍なら体重は 125 倍であるから、腕力もその比率で強いはずだ。

を帯びるだろう。先の引用もそうだが、対談中の相互のやり取りの中で、作者スウィフトの風刺が浮かび上がって来ると考えられるからである。

例えば、以下の箇所ではガリヴァはかなり怒っているようである。ガリヴァは登場人物としての自分の経験を、語り手ないし書き手として読者に述べている。彼の怒りの原因は、ブロブディンナグ国王の発言に由来するものであり、国王の発言内容自体が、この作品に特有の間接話法で表記されている。

[H]e observed, how contemptible a Thing was human Grandeur, which could be mimicked by such diminutive Insects as I: And yet, said he, I dare engage, these Creatures have their Titles and Distinctions of Honour; they contrive little Nests and Burrows, that they call Houses and Cities; they make a Figure in Dress and Equipage; they love, they fight, they dispute, they cheat, they betray. And thus he continued on, while my Colour came and went several Times, with Indignation, to hear our noble Country, the Mistress of Arts and Arms, the Scourge of *France*, the Arbitress of *Europe*, the Seat of Virtue, Piety, Honour, and Truth, the Pride and Envy of the World, so contemptuously treated. (II, iii, 150)

国王は次のように語りかけられた。人間の偉大さもつまらないものだな。こんなまるで小さな虫けら（私のことだ）にまねされるとは。なお言葉を続けて、しかもこの連中は名誉を表す肩書きや爵位の制度も持ち、小さな巣や隠れ穴をせっせと作って、家だとか町だとか称している。衣装や設備に粋をこらしたり、恋もする、戦もする、論争もする、詐欺も働く、裏切りもする、というではないか、と言われた。このようになお喋り続けられ、我が愛する祖国、学術と武術の女主人、フランスの打擲者、ヨーロッパの裁定者、美德と敬虔と名誉と真理の本場、世界の誇りにして羨望の的たる我が祖国がさんざん罵倒されるのを聞くと、さすがの私も怒りで顔色が何度も変わってしまった。

この箇所では、彼にしては珍しく、ガリヴァは「怒り」‘indignation’を覚えたと言っているのだが、作者スウィフトの風刺の矛先は、もちろん、ブロブディンナグの国王にではなく、英国という国家にこそ向けられている。国王は、スウィフトの代弁者であり、国王の批判的な言辞に過剰に反応するガリヴァは、いわば滑稽な道化の役割をさせられているという図式がここでは成り立っている。

る。巨人の国王から見れば、ちょうど12分の1のサイズであるガリヴァは、「小さな虫けら」‘diminutive Insects’に見えて当然である。正しい判断力と美德を兼ね備えた大きくて立派な国王。対するは、小さなガリヴァに代表される悪徳に染まった英国人、ひいては人類そのもの、という図式である。風刺の構造としては誰でも理解しやすいように工夫されていると言っても良い。

ここで注目すべきは、ガリヴァの報告中の言葉「世界の誇りにして羨望的」‘the Pride and Envy of the World’の部分であるだろう。これを先ほどの訳文のように「誇りと羨望」としてしまつては、はっきりしないのだが、字面では「傲慢」と「嫉妬」である。そう考えると、ガリヴァの‘Pride and Envy’という言葉の背後には、英国を決して賞賛してはいない彼自身の気持ちを想定することも不可能ではない。また、ガリヴァ自身は、祖国を称賛したいという正直な気持ちを語っているに過ぎないとしても、作者スウィフトは、敢えてガリヴァに、英国について過大な評価をさせている、と言うことはできる。そう考えてみると、この部分のガリヴァの発言の全体を通じて、あるいは第2篇全体を通じての、彼の立場がはっきりするだろう。卑小なガリヴァが褒めれば褒めるほど、巨人の国王には馬鹿にされるという構造が一貫していて、その背後でスウィフトが風刺の矢を四方に放っているという訳なのだ。結局のところ、ガリヴァが怒ってようがいまいが、この作品を風刺として大局的に見た場合は、大した違いはないということになる。むしろ「怒り」に関しては、ガリヴァ自身の「怒り」というよりは、作者スウィフトの「怒り」にこそ注目すべきである。

IV

以上のように考えてくると、『ガリヴァ旅行記』において怒っているのは、結局のところ、作者スウィフトではないかということに思い至る。そう考えると、また様々な見方ができるようになる。その一つとして、『セヴン』の犯人ジョン・ドウと『ガリヴァ旅行記』の作者スウィフトは、その心情において通底する物を持っているのではないかと考えることも可能になってくる。ジョン・ドウとスウィフトは、虚構の人物と実際の風刺家、20世紀アメリカ人と18世紀イギリス人、怪しいサイコパスと政治宗教界の大人物、というように全く異なる。世間に鉄槌を下す手段は、片や殺人（一部未遂）であり、片や風刺的な散文である。このように、外面的には両者は全く異なるのであるが、その内面あるいは心性には、共通するところが見られはしないだろうか。それを表す一つの例として、彼らの以下の言葉を比較してみよう。まずはジョン・ドウの

台詞から。

Wanting people to listen, you can't just tap them on the shoulder anymore. You have to hit them with a sledgehammer, and then you'll notice you've got their strict attention.¹⁹

人に注目してもらいたいなら、ただ肩を軽く叩いてやるだけではもう駄目だ。でかいハンマーでぶん殴ってやらなくちゃ。そうすれば奴らは気をつけるようになるわけさ。

これは、映画最後のシーンで、荒野に向かって移動中の警察車両の中で、ジョン・ドウがミルズやサマセットに述べる台詞である。ジョン・ドウにとっては世間こそが汚れきっている。その世間に対し衝撃を与えようとする彼の態度がこの台詞には独善的な形で表明されている。まさに大ハンマー (sledgehammer) で「鉄槌」を下してやろうという確固たる決意が垣間見える台詞である。

これに対して、スウィフトはどうか。『ガリヴァ旅行記』第3篇「ラピュタその他への渡航記」‘A Voyage to Laputa, &c.’を見てみよう。²⁰ その中の、ラガードにあるアカデミー (企画院) の場面では、物忘れの激しい首相に、いかなる手段で物事を覚えておいてもらうか、という問題に関して、以下のような便法が提案されている。

[W]hoever attended a first Minister, after having told his Business, with the utmost Brevity, and in the plainest Words; should at his Departure give the said Minister a Tweak by the Nose, or a Kick in the Belly, or tread on his Corns, or

¹⁹ これは映画の台詞である。脚本では下記のように少し異なっているが、趣旨は同じである。JOHN DOE: Wanting people to pay attention, you can't just tap them on the shoulder. You have to hit them in the head with a sledgehammer. Then, you have their strict attention. (人に注目してもらいたいなら、ただ肩を軽く叩いてやるだけでは駄目だ。でかいハンマーで頭をぶん殴ってやらなくちゃ。それでやっと奴らは気をつけるようになるのさ。) *Seven*, p.126. なお、拙訳は、島村宣男「“long is the way / and hard…” — *Se7en* (1995) —」(『関東学院大学文学部紀要』112号、2007年)の中での訳文を参考にした。

²⁰ 近年は「ラピュタ」ばかりが有名になってしまっているが、正式なタイトルは、「ラピュタ、バルニバービ、クラブダブドリブ、ラグナグおよび日本渡航記」‘A voyage to Laputa, Balnibarbi, Lugnug, Glubbudrib, and Japan’である。

lug him thrice by both Ears, or run a Pin into his Breach, or pinch his Arm black and blue; to prevent Forgetfulness: And at every Levee Day repeat the same Operation, till the Business were done, or absolutely refused. (III, vi, 277-78)

首相に拝謁するものは誰でも、この上なく短くかつ平易な言葉で用件を済ませたら、別れぎわに当の大臣に対し、鼻をぐいと引っ張るか、腹を蹴るか、魚の目を踏んづけるか、両耳を3回引っ張るか、ズボンに針を刺すか、青あざができるほど腕をつねるかしたら良い、用件が済むか、完全に拒否されるかまで、接見ごとに同じ処置を繰り返せと言う。

この言葉は、忘れっぽい年寄りの大臣にどう対処するかという、個別具体的な内容のものであるので、世間一般を対象にしたジョン・ドウの台詞とは多少ニュアンスが異なる。さらに、いわゆる列挙法で次々に紹介されている方法も、様々な痛めつけ方が挙がっており、最後には滑稽さまで漂って来る。『セヴン』は時間の制約がある映画なので、台詞も簡潔に一言で済ませねばならないのに対し、『ガリヴァ旅行記』は古いタイプの散文で書かれた長編であり、一つの事柄を敷衍して長々と書けるという違いもあるだろう。しかしながら、ここで挙げられた、蹴る、抓るといった、肉体を損傷する荒っぽい手段に訴えてまで相手の注意を引きつけようとする態度の根底にあるものは、ジョン・ドウと同様の、他者に対する攻撃性であることは明らかである。

実は、この言葉自体は、ガリヴァ自身の考えたことではなく、ガリヴァによって、ある医者言葉として紹介されているものであるのだが、元を正せば、ある医者の考えと言うよりは、この箇所を執筆している人物である作者スウィフトの考えであると解釈するのが正しい。結局のところ、スウィフトとジョン・ドウは、相通じるものを持っていることがよく分かる箇所であることになるのだ。²¹ そこにあるのはやはり「義憤」あるいは「公憤」ということになるのであろうか。ジョン・ドウの場合は、犯罪が横行し、各人がその本分を尽くさないような現代社会の歪みに対する憤懣が、極端な仕方では噴出してしまったと言える。脚本のウォーカー自身も、インタビューに答えて以下のように述べている。「ジョン・ドウは、通りを歩きながらも、悲劇や不潔、不道徳や不正につ

²¹ より厳密には、ジョン・ドウでなく、脚本家のウォーカーの考えであると言うべきである。ひいては、監督、プロデューサーも含む、映画の制作者全体の考えであるとも言える。映画においては、小説の「作者」に相当する人物は誰かを判断することは、実は存外難しいことである。

いて考えるのを止めることができないような男だ”“John Doe is a guy who walks down the street and can't stop thinking about the tragedy and squalor and immorality and injustice, and it all builds up in him.”²² それに対して、スウィフトの場合は、国も時代背景も異なるものの、彼の周囲もやはり見渡す限り腐敗墮落していたのだ。『セヴン』において一番怒っていたのは、妻子を無惨に殺されたミルズではなく、むしろジョン・ドウだったのではないだろうか。そして、『ガリヴァ旅行記』で一番怒っていたのは、プロブディンナグの国王でも、フウイヌムの主人でもなく、ましてやガリヴァでもない。当の作者スウィフトではなかったかというのが当面の結論である。

『セヴン』の刑事ミルズは、「怒り」に任せて自らの職業に相応しい本分を忘れ、ジョン・ドウを殺害してしまったが、彼の「怒り」は、心情的には十分理解できるものになっている。愛する妻子を惨殺された夫としては、殺人はむしろ正当な行為であったと捉えられるかもしれない。だが、ミルズは、公人としては、あくまでも法と正義に基づいて行動せねばならない立場であるのだ。

(この点が某国の大統領とは異なっている。)『セヴン』におけるミルズの「怒り」は、恐らく誰もが経験する可能性がないという点で、極めて特殊なものになっていると言わざるを得ない。そして、それと同じくらいジョン・ドウの「怒り」も、その発散の仕方が常軌を逸しているという点で、極めて特殊なものである。しかしながら、間違った世間に対して、彼なりの「怒り」を持ったという事実を考えれば、誤りを矯正し、あるべき正しい世界を求めたいと願う心がある者にとって、ジョン・ドウの心情もまた、決して理解できないものではないとも言えるだろう。だが、一方では、世間の耳目を引くためとはいえ、極めて残虐な手段に訴えるジョン・ドウの手法は、現実には到底許されるものではない、異常な方法であるのも事実である。まさに、ミルズとジョン・ドウのそれぞれの「怒り」の特殊性こそが、この映画を成立せしめている点なのだ。そして、『ガリヴァ旅行記』を書いたスウィフトもまた、いろいろな意味で特殊な「怒り」を持つタイプの人物であったと最後に付け加えておきたい。

V

ミルズやジョン・ドウの、あるいはスウィフトの「怒り」はさておき、我々個人も平生から多種多様な「怒り」に曝されて日々を暮らしている。そこで文学と映画からは少し離れるが、この「怒り」に対処する方法としてどのような

²² *Seven*, xiii.

方策が有効かという点について、蛇足的にはあるが、本論の最後に考察してみたい。まずは『ガリヴァ旅行記』を見てみよう。ガリヴァは、次のように述べている。

It was in vain to discover my Resentments, which were always turned into Ridicule: And I was forced to rest with Patience, while my noble and beloved Country was so injuriously treated. (II, vii, 190)

はっきり怒りを表面に現わすのも無駄な話であった。結局いつも嘲笑されるのがおちであってみれば。なので、自分の心から愛する高貴な祖国がさんざん馬鹿にされても、その間は、じっと我慢しているより他はなかったのだ。

プロブディンナグ国王に、愛する祖国を馬鹿にされ続けたガリヴァの取った対処法は、じっと「我慢」することを強いられ、それを甘受したことである。仮に強いられたものであるにせよ、「我慢」‘Patience’こそが、最も有効な手段の一つであったということだ。元来、この箇所は、英国の歴史や政情を揶揄嘲笑する国王の言葉を受け、次の章で更に風刺を続けていくための、いわゆるつなぎの言葉であるに過ぎない面がある。とはいえ、読者として、作品に込められたメッセージを自由に解釈する権利を行使するならば、世俗的かつ実利的にこの作品を読むこともまた許容されるだろう。その意味で、ガリヴァの「我慢」という言葉は、我々が参考にするに足る言葉であると考えられる。ところが、だからといって、ガリヴァ自身は大して立派な人物であるということにはならない。この後の箇所で、ガリヴァは、火薬の製法と効果について自慢げに語ることにより、更なる嫌悪感を国王に与えてしまうという仕儀になり、またしてもガリヴァの小人物ぶりが際立つことになってしまうからだ。この点は、残念なことではあるのだが、致し方ない。そこで、もっと立派な人物の「怒り」への対処法として、ローマの哲学者セネカの残した言葉を見てみることにする。彼は次のように述べている。「怒りを治す最良の薬は「引き延ばし」である」と。²³ また、彼はこうも言っている。

第一に大切なことは怒らないことであり、第二は怒りを止めることであり、

²³ セネカ、茂手木元蔵 訳『怒りについて 他一篇』岩波書店、1980年、93頁。

第三は他人の怒りをも癒すことである。それゆえ、私が第一に言いたいことは、どうすればわれわれは怒りに陥らないですむかであり、第二には、どうすれば自分を怒りから解放できるかであり、最後には、どうすれば怒っている者を抑え静めて、正気に連れ戻すかである。²⁴

自分自身だけでなく、第三者の怒りもまた解決しようとする点は、この高名な哲学者ならではの高邁な態度であると言えるだろう。これに加えるに、「七つの大罪」の個々の罪の様態とその救済についての詳細な記述があるため、『セヴン』中でもしばしば言及されている、『カンタベリー物語』の最終章「教区司祭の話」‘The parson’s Tale’には、以下の方策が述べられている。

The remedye agayns Ire is a vertu that men clepen Mansuetude, that is Debonairetee; and eek another vertu, that men callen Pacience or Suffrance.²⁵

怒りの罪に対する救済は人がマンスエチューデと呼ぶ徳であります。すなわちこれは心の優しさです。そしてまた、人が忍耐とか辛抱とか呼ぶもう一つの徳もそうです。²⁶

古来、「怒り」に対する方策として挙げられている事柄は、誰もが似たようなことを述べていて、いずれも大して違いはないようである。現代の我々もまた、ともかく「我慢」し「忍耐」するに如くはないのだろう。とはいえ、ピアスにかかれば、これも最善の策ではないことになってしまう。彼に言わせれば「忍耐」とは次のようなものなのである。

PATIENCE, n. A minor form of despair, disguised as a virtue. ²⁷

PATIENCE【忍耐】名 軽症の絶望で、美德を装っている。²⁸

²⁴ セネカ、118 頁。

²⁵ The Project Gutenberg EBook of Chaucer’s Works, Volume 4.

<<http://www.gutenberg.org/files/22120/22120-h/22120-h.htm#parson>>

²⁶ チョーサー作、榊井迪夫 訳『完訳 カンタベリー物語（下）』岩波書店、1995 年、228 頁。

²⁷ Ambrose Bierce, “The Devil’s Dictionary.” iBooks. <<https://itun.es/jp/AW8vD.1>>

²⁸ ピアス、筒井訳『悪魔の辞典 下』74 頁。

このように言われると、正にそれはその通り、とも思えてくる。いかにして「怒り」に上手く対処するかは、簡単には答えられない、一筋縄では行かない種類の問題であり、様々な知見が必要になる問題だということだろう。それは、とりもなおさず、文学の、あるいは映画の中心テーマとなりうることを示している。その顕著な例が本論で扱ってきたいくつかの作品であるとも言えるのだ。

結び

以上、本論では「七つの大罪」の内の一つである「怒り」に着目して、『ガリヴァ旅行記』と『セヴン』等のいくつかの作品を扱ってきた。「怒り」の辞書的な意味を一瞥した後、軽い「怒り」の例として、フロベールとピアスのアフォリズムによる意味付けを見てみたが、両者ともに機知に富んだ言い草であった。それに対して、「七つの大罪」の一つとしての「怒り」をこの上なく凄惨な形で扱った映画『セヴン』の刑事ミルズと犯人のジョン・ドウには、深甚な「怒り」の顕著な例を見た。常軌を逸した「怒り」が発現する様は、誰もが忘れ難いものである言えるだろう。一方、オムニバス映画『七つの大罪』での「七つの大罪」は、『セヴン』とは対照的に、ごく世間的で軽妙なものとどまっていた。同じテーマでも、その扱い方によっていかに大きく変わるかが垣間見え、同時に「七つの大罪」という、ある意味では人類に普遍的なテーマを扱う際の可能性の幅広さを実感できた。さらに『セヴン』の犯人ジョン・ドウと『ガリヴァ旅行記』の作者スウィフトには、両者に通底する「義憤」ないし「公憤」を、それぞれの言葉の一端からではあるが、指摘し、月並な解釈ではあるのだが、『ガリヴァ旅行記』においては、最も怒っているのは作者スウィフトに他ならない、とした。最後に蛇足的に「怒り」への対処法を提示しようとしたが、この件については、より深く考察すべき課題であることが再確認できた。「怒り」のような一般的で普遍的な概念を扱う際には、個々の文学作品や映像作品を扱うだけでは限界がある。哲学、宗教の領域が関わるだけでなく、処世術に関する知見も必要であろう。更には、最近の脳科学の成果を参照するのも一つの方策ではないだろうか。「七つの大罪」の中の個々の「大罪」や、これら以外の他の様々な「悪徳」は、人が生きている限り、決して避けることができない大きな問題であることには誰も異論はないであろう。本論を契機として、今後も様々な手法で「怒り」を始め「高慢、嫉妬、怠惰、貪欲、大食、色欲」等について、それらが意味するところを考えて行きたい。

参考文献

- Chaucer, Geoffrey. *The Canterbury Tales*. London: Penguin Books, 1951.
- Damosch, Leo. Introduction. *Gulliver's Travels*. By Jonathan Swift. New York: Signet-Penguin, 2008. v-xii.
- Swift, Jonathan. *Gulliver's Travels*. Cambridge: Cambridge UP, 2012.
- Walker, Andrew Kevin. *Seven*. London: Faber and Faber, 1999.
- 芥川龍之介『侏儒の言葉・西方の人』東京：新潮社、1995年。
- 島村宣男「“long is the way / and hard…” — *Se7en* (1995) —」『関東学院大学文学部紀要』112号、2007年、145-179頁。
- ジョナサン・スウィフト、梅田昌志 訳『ガリバー旅行記』東京：旺文社、1976年。
- 、富山太佳夫 訳『ガリヴァー旅行記』東京：岩波書店〈ユートピア旅行記叢書6〉、2002年。
- 、中野好夫 訳『ガリヴァ旅行記』東京：新潮社、1951年、1992年改版。
- 、平井正穂 訳『ガリヴァー旅行記』東京：岩波書店、1980年。
- 、山田 蘭 訳『ガリバー旅行記』東京：角川書店、2011年。
- セネカ、茂手木元蔵 訳『怒りについて 他一篇』東京：岩波書店、1980年。
- 田中紀子「「戦う価値がある」のか？—『セブン』に見る現代都市—」『大手前大学人文科学部論集』4、2003年、81-92頁。
- ダンテ、平川祐弘 訳『神曲 煉獄篇』東京：河出書房新社、2009年。
- チョーサー作、榊井迪夫 訳『完訳 カンタベリー物語』（全3冊）岩波書店、1995年。
- アンブローズ・ピアス、筒井康隆訳『筒井版 悪魔の辞典〈完全補注〉下』東京：講談社、2009年。
- G. フローベール、山田 薈 訳『紋切型辞典』東京：平凡社、1988年。
- Bierce, Ambrose. “The Devil’s Dictionary.” iBooks. 30 September 2016 <<https://itunes.es/jp/AW8vD.l>>
- Flaubert, Gustav. “Dictionnaire des idées reçues.” iBooks. 30 September 2016 <https://itunes.es/jp/4tE_K.l>
- ‘Les Sept Péchés capitaux.’ 30 September 2016 <https://fr.wikipedia.org/wiki/Les_Sept_Péchés_capitaux>
- ‘Swift’s Epitaph.’ 30 September 2016 <https://en.wikipedia.org/wiki/Swift's_Epitaph>
- 『七つの大罪』（*Les Sept Péchés capitaux*）1952年。シェイディーバス発売、DVD。